

船山馨
茜いろの坂

下



山 馨
いろの坂
下



新潮社版

© Kaoru Funayama 1980, Printed in Japan

^{あかね}茜 ^{さか}いろの坂 (下)

昭和55年9月25日発行

昭和55年11月10日3刷

著者 ^{ふな}船 ^{やま}山 ^{かおる}馨

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町71

電話・業務部(03)266-5111

・編集部(03)266-5411

振替 東京4-808

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本

定価 1000円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

目

次

							9
						断	橋
						7	
						10	
						螢	火
						34	
						11	
						風	の
						行	方
						63	
						12	
						氷	河
						に	て
						101	
						13	
						白	い
						夜	
						127	
						14	
						落	葉
						の	諧
						調	
						156	
						15	
						モ	ン
						ブ	ラン
						194	
						16	
						シ	ャ
						モ	ニ
						ー	
						の	夕
						映	え
						227	
						*	
						あ	と
						が	き
						261	

昔
い
ろ
の
坂
(下)

9 断 橋

六月の終わりに近く、修介はもういち度、大きな発作に襲われた。

大阪空港から香港へ帰るアンリ・ペルタンを見送りがてら、竹井明大阪支店長をまじえて、もしボワイエと提携した際の細かい条件を検討して、一応つぎの株主総会に提案してみる約束をした。

伊丹へは竹井が見送り、修介はホテルへ帰ったが、その途中の車のなかで発作に見舞われて、そのまま、まる四日病院に留め置かれた。

翌朝、聡一が駆けつけてきたときには、発作そのものはおさまっていたが、予後の疲労で、まだ身動きも出来なかった。

ボワイエのことは、竹井支店長にも、株主総会まで厳秘を守るように、固く言い含めてあるくらいなので、聡一は修介が委任状^{あかし}宛めに東奔西走していると思っている。

彼は總會の期日が切迫してきて、気が気でないらしく、しきりに委任状の集まりぐあいを訊きたがった。彼としても、修介が失脚することにでもなれば、三彩堂での彼の前途もまず見込みはなくなるのだから、氣を揉むのも無理ではなかった。

しかし、修介は極度の疲労のために、口をきくのも億劫であった。

このごろでは、目眩や立ちくらみなどは日常茶飯事で、発作のうちには入らなくなっている。大きい発作に見舞われると、発作そのものの激しい苦痛もだが、予後の衰弱がなかなか恢復しない。容貌もいかにも重病人めく。

これは遅ればせながら、堀江派に渡りをつけて、なんとか身の安全をはかったほうがよさそうだ——と、聡一がベッドの彼を見おろしながら焦り立っているのが、修介には鏡を覗くようによくわかるのだ。

可哀相に。無理もない——と、修介は思った。対岸の火事で右往左往する人を、見ているような、へんに静まりかえった気持ちであった。

実際、病勢は檜垣医師の予想を超えて、昂進しているのかもしれないのである。九カ月どころか、あと一、二カ月で死ぬことだってあり得ないことではない。

軍隊時代のように堀江とちよっとした賭けでもやってみたい感じであった。彼のことから、短いほうに賭けるだろう。すると、私はやはり九カ月か。九カ月あれば——。いったい、九カ月でなにが出来るというのだろう——。

修介はなににも出来なくてもいい、と思った。節子ではないが、それが自然の摂理というものなら、受け容れるほかはないのだ。

修介は衰えた頬に、かすかに微笑を溜めたまま、疲労が誘い込む眠りのなかへ落ちていった。

聡一に付き添われて東京へ帰ったつぎの日、響子が鶴崎六郎と、彼の就職の礼かたがた見舞いに来た。

「あら、響子さん……。まあ……」

律子は響子のお腹を見るなり、露骨に厭な顔をしたが、響子はとり合わなかった。六郎は顔色が変わった。

礼に来ようとして、都合を聴きに電話を入れて、杉江から大阪で倒れたことを聴いたらしい。昨日帰って来たことも、杉江の電話で知った様子であった。

鶴崎六郎は修介の予想では、やたらに髪の毛を長くした、薄汚い恰好の若者のつもりであったが、ネクタイこそしていないが、吊しの背広を着て、しきりに手巾で汗を拭いていた。眉の太い、顎の張った、風采のあがらない小男で、どうして響子が惚れたのか、不思議なくらいであった。ただ、眼が少年のように綺麗であった。

「鶴崎です。いまごろになって、照れ臭いんですが……」

六郎は頸筋に手をやって、体をすぼめた。いかにも気詰まりで、身の置きどころがないという様子であった。

「仕事はどうだね」

修介はそんな彼の剃き出した素直さに、かすかな当惑を感じながら訊いた。

「助かりました。僕には打ってつけです」

と、六郎は武骨に頭を下げた。

「井岡にも私にも、礼など言う必要はないよ。君が来てくれて、助かったと、井岡のほうから礼を言っているくらいなのだ」

「時間も楽ですから、翻訳のほうも、これまで通りやれますので、子供が生まれても、なんとかやってゆけそうです」

「そうあつてももらいたいね。響子が中絶などと言ってきたときには、君と別れさせようと思ったくらいだからね」

修介はそう言ってから、少し頬を緩めた。

「君は私が嫌いだそうだが、第一印象はどうだね。君の印象は必ずしも悪くはないが……」

「僕もそう申しあげたいところですが、残念ながら、原則は変わりません。どうもすみません」

「お父さん、こういう人なのよ」

傍らから響子が気を遣って、とりなすように口を挟んだ。

「いや、結構。うちの店にも、君と同じようなのがいるが、仕事はなかなか出来る男だ」

修介はふと、ジュネーヴへ帰った守口吉郎のことを思い浮かべていた。

「それより、お父さんはなにかわたしたちに隠していることがあるんじゃない？」

響子が真顔になって訊いた。

「どうして？ そんなことはないつもりだがね」

修介は煙草の煙が眼にしみるふうを装って、さりげなく視線をそらしていた。

「杉さんが心配する通り、お父さんの軀、ただごととは思えないわ。手術の後、かえって悪くなるばかりじゃない。それに兄さんたちも、わたしを煙たがっているわ。家へ寄せつけまい、お父さんに会わせまいとしているみたい。なんとなく、わたしだけがつんぼに敷に置かれている感じだわ」

「聡」たちのことは知らんが、私に関するかぎり、お前が心配するようなことはなにもない。お

前は生まれてくる赤ん坊のことだけ考えていればいいんだ」

「僕もそう言うんですが、あなたとお兄さんたちが、なにか共謀しているって、きかないんです」

六郎が口を挟むと、

「わたしの勘はいいのよ」

響子がやり返した。

「共謀はよかったな」

と、修介は笑顔になった。

「私はお前とも聡一とも、共通の秘密を持ちあうほど、仲がよくないのは、百も承知だろう。あれにはあれの秘密があるかもしれないが、少なくともそれは私の秘密ではないよ」

「それならいいけど……」

響子是不承々々銚を納めた。

聡一が響子と修介の接近を嫌うのは、あと一年足らずで転げ込むはずの遺産から、響子を遠ざけたいからであるのは、透けて見えていた。

修介はそういう聡一を、情けない男だとは思ふものの、不思議にこれまでのように腹立たしくもなく、不愉快ですらなかった。

出来損ないではあるが、あれはあれなりの貧しい考え方で、自分の幸せを願っているだけなのだともむしろ苦笑する思いであった。

七月の声を聴いて間もない、小雨模様のある朝、修介は大阪から帰って初めて、店へ出て行っ

た。株主総会の準備のための、役員会議の日だったからである。

暑さはそれほどでもなかったが、遅ればせの梅雨がきたのか、湿度が高く、風のない、小雨の
烟る街なかには、蒸し風呂のような温気がたれこめていた。

会議は十時少し過ぎから始まった。

会議室には、大阪の竹井明も駆けつけて、十人ほどの重役の全員が顔を揃えていたが、修介が入ってゆくと、いっせいに私語をやめて振り向いた。

申し訳程度に会釈をする者もあれば、黙って、不安げに見つめている者もあった。

堀江だけが笑顔で、

「社長。こちらへ」

と、自分の隣の席へ誘った。

そこが、いつもの修介の席であり、議長席でもあった。

修介は自分が少しも動揺していない、と感じた。

それは堀江の笑顔に、思いがけないといった、かすかな翳りが差していることでもわかった。

堀江やその派の重役たちが期待していた修介は、深傷を負って、追いつめられたものの凄まじさか、観念して尾を垂れた負け犬のみじめさであった。それを裏打ちするだけの自信を、彼らは持っているつもりであった。

ところが、修介の表情は冷静で、その態度は自若としていた。

いくぶん病みやつれの気味はあるが、その静かな落ちついた表情や物腰からは、彼がなにを考えているのかを推察するのは困難であった。

ただ、重役たちにも、今日の修介が、いつも見慣れた彼と、異質の人間のように思えたのは確

かであつた。

堀江の不安は波立ってきた。

そんなはずはない、と彼は思う。株主の委任状は、株主総会の議決権に必要な数を、遙かに上廻るだけ蒐めてあるのだし、その上S銀行の全面的な支援も取りつけてある。

修介に残された唯一の血路は、F銀行の力を借りることだろうが、竹下ともあろう利^きけ者が、そんな火中の栗を拾うわけはない。げんに、竹下は修介の申し出を拒絶したという、岩中からの情報も得ていた。ほかに、修介に總會を乗り切る、どんな手があるというのか。

しかし、相手を倒すためには、どんな悪辣な手段に出るかわからない彼のことである。思いもかけない手を打って来たのかもしれない。

修介が席につくと、役員室付秘書の小室が、タイプの刷り物を配ってまわつた。

それはこれから協議する、株主總會に提案する議案の、原案を列挙したもので、きまりきつた会計報告などは別として、増資の件から役員改選の件まで、重要案件がならんでいた。

役員改選の狙いは、もちろん修介を追い落とすことにある。堀江の心づもりでは、修介が社長の椅子を滑り落ちるのはもちろん、おそらく平取締役にも止まり得ないはずであつた。

珈琲とクッキーが各席に配られたが、手をつける者もない。煙草を吸う者さえなかった。異常な緊張した空気が、室内に張りつめていた。

「社長……」

修介がいつまでも発言しないので、隣席の堀江が彼をかえりみて、低い声で審議の開始を促した。

重役たちの何人かが、上眼遣いに修介の顔色をうかがつた。

修介は立ちあがると、誰にともなく一礼して、

「済まないが、会議を始める前に、ちょっとだけ堀江君と二人だけにしていただきたい」

と言うと、眼顔で堀江を促して、ゆつくり部屋を出た。

「なんです、社長。今更話すことも聴くこともない筈ですがね」

社長室で向かい合うと、堀江は煙草に火をつけ、薄笑いをしながら、傲然と足を組んで胸をそらした。

修介は黙って内ポケットから封筒をとり出すと、それを卓子のうえに置いた。

「なんですか、それ」

「辞表だ。私は三彩堂から身を引くことにした」

修介は静かに言った。

堀江は薄笑いを浮かべたまま、

「全面降伏ですか」

と、勝ち誇ったように彼を見おろした。

しかし、修介にしてみれば、堀江とのたたかいに万策尽きたのでも、闘志を失ったのでもなかった。

彼の時間は、もはや多くはない。そのあいだに、なすべきいくつかのことがあった。三彩堂から身を引くことは、その最初の事柄であった。

これまでの彼は三彩堂の経営に専念することで生き甲斐を感じてきたが、しかし、考えてみれば、それは彼の軍隊時代の罪悪から生まれ、多くの非行を積み重ねることによって発展してきた、謂わば彼の罪の象徴でもあった。